

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE

GAKUEN DAYORI



31 JULY 2009

No.156

小樽商科大学
学園だより

特集 **IT'S ONE WORLD**

特集2: コラム 100周年に向けて 第5回「キャンパスを『緑丘』色で」
特集3: Pick UP! 「室内管弦楽団」





GAKUEN DAYORI



学園だより

題字は 山本眞樹夫 学長

No.156 31 JULY 2009
OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE

CONTENTS

【特集】It's one world!	2
コラム 100周年に向けて	11
何がでるかな?先生のお気に入り!!	16
部・サークル紹介	18
Pick UP!「室内管弦楽団」	19
学生企画事業実施小委員会	20
NEWS	22
新任教員紹介	
劉 慶豊(商学部経済学科)	24
河森 計二(商学部企業法学科)	25
ヘルシーライフジャーナル	28
写真でみる小樽高商・商大小史 ^㉓	29

IT'S ONE

●GERMANY

ドイツ連邦共和国 1名
ベルリン経済・法律大学

●U.K.

英国 1名
シェフィールド大学

●ICELAND

アイスランド共和国
2名

●FRANCE

フランス共和国 2名
ポール・セザンヌ大学
エクス＝マルセイユ大学

●SPAIN

スペイン
ブルゴス大学

●AUSTRIA

オーストリア共和国
ウィーン大学

TANZANIA

タンザニア連合共和国

●POLAND

ポーランド共和国 1名

●RUSSIA

ロシア連邦 1名
ロシア極東国立総合大学

●THAILAND

タイ王国 1名

●MALAYSIA

マレーシア1名

「グローバル化」といわれる今日。世界がひとつであるという認識はますます重要になってきています。「国際交流」が盛んであると言われている商大ですが、みなさんは国際交流をしていますか？国際交流を通して見えてくるものは何なのでしょう？一緒に考えて見ましょう。

WORLD!!

CONTENTS

ページ

★国際交流してますか？ 学生へアンケート	4P
★留学生インタビュー	6P
★国際交流はココでできる！	8P
★さまざまな交流のカタチ	9P
★特別：OBさんにインタビュー	10P
★交流センターから	10P

●CHINA

中華人民共和国 41名
東北財經大学

●KOREA

大韓民国 7名
成均館大学校

●TAIWAN

台湾 1名

●VIETNAM

ベトナム社会主義共和国
ベトナム国家大学
ホーチミン市国際大学

●U.S.A.

アメリカ合衆国 2名
ウェスタンミシガン大学
オグレスープ大学
サウスダコタ大学
ミュンヘン大学

●MEXICO

メキシコ合衆国 1名

●AUSTRALIA

オーストラリア
ウーロンゴン大学

●NEW ZEALAND

ニュージーランド 1名
オタゴ大学

2008年度学生派遣数 学生交換留学・・・14名

USA	5名
CHINA	4名
NEWZEALAND	2名
GERMANY	2名
ICELAND	1名
短期語学研修	21名

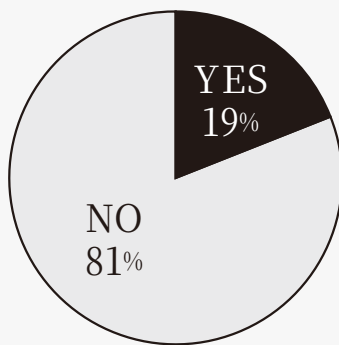
2009年4月における各国からの留学生の人数です。国名の下には商大との協定締結校を記載しました。

「国際交流」 していますか？

200名に
聞いた！

「国際交流」が盛んに行われているといわれることの多い商大ですが、本当のところはどうなのでしょう？？こんなことしたい、こうだったらいいなという学生の思いがたくさん集まりました。

1. 国際交流していますか？



どのような交流をしていますか？

- 1. 部・サークルでの交流15名
- 2. 日常生活, 会話11名
- 3. 授業 (グループワークなど) ・ゼミ 7名
- 他には・・・メール, チューター, 旅行など

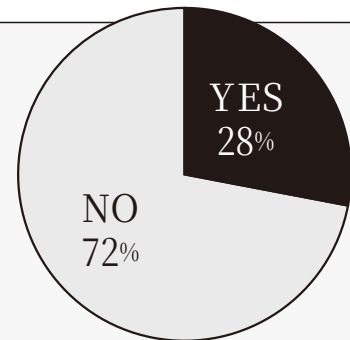
どのような交流したい？

- 1. 友人になりたい, 会話がしたい!32名
- 2. 交流パーティをしたい!10名
- 3. 異文化交流をしたい・留学をしたい 7名
- 他に・・・グループワーク, 国際結婚 (!) など

2. 商大の留学生と交流していますか？

きっかけは？

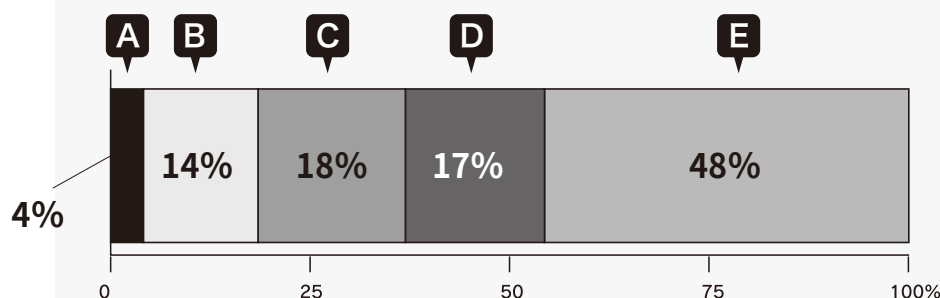
- 1. 部・サークル 32名
- 2. 授業・ゼミ 15名
- 3. チューター 4名
- 4. 友人の紹介・自分から話しかけた 各3名



YESでもNOでも深めたい人がほとんど！！

●いろんな考えの人に出会いたい！ (1年・男) ●自分とは違う言葉や文化を持つ人と触れ合うことは大事だと思う (3年・女) ●だって世界はひとつじゃん (2年・女) ●第2外国語を学んでいるので実際に使ってみたい (3年・女) ●交流を通じて、自分の知らない世界を知ることができるから ●見聞を広める, 有効な手段であり, 大きな人生経験になるから (1年・男) ●商大は外国語に力を入れているのでそれを生かしたい (1年・男) ●他国へ目を向けていないと将来苦労する (1年・男) ●国際化の進む現在の日本社会において, 大学時代から世界に目を向け始めるのは決して早すぎるわけではないから (2年・男) ●外国に行かなくても外国人の方と接する機会が多いため (3年・女) ●自分と違う価値観に触れたい (4年・女) ●将来どの企業に就職しても今では国際交流を求められると思うため (3年・女) ●世界の秩序と安定のためには, 他国の文化や歴史を理解し, お互いを尊重しつつ交流をしていくことが不可欠だと思うから (4年・女)

3. チューター制度についてお聞きします。あなたはチューターを…



- A. している・・・8人
- B. してみたい・・・28人
- C. したいけど不安・・・36人
- D. したくない・・・34人
- E. 知らない・・・89人

4. 商大における国際交流に関して気づいたこと（問題）や期待すること（要望）

1. 交流の場を増やしてほしい（イベント、授業含めて） 25名
2. 留学制度について 6名
3. イベントなどのPRを増やしてほしい 5名

- サークルや部活の枠にとらわれず、誰でも気軽に参加できるイベントが定期的にあると良いと思う（4年・女）
- 国際交流パーティがもっと頻繁にあって、国際交流サークル以外の人も参加しやすい雰囲気があるといいなと思います。（4年・女）
- 国際交流の授業を作れば良いと思う（4年・男）
- あまり活性化するような運動がなされていない。留学生と一緒に授業をもう少し増やしても良い（4年・男）
- 強制的に出会うシステムがあればいいなと思います（4年・女）
- 両者に向けた講義をもっと増やしたらいいと思う（3年・女）
- 留学生が受講する講義意の教室を、日本人学生が使う教室と同じにしたほうが、廊下で会う機会も増えていいと思います（4年・女）
- 国際交流ラウンジを開放的にしてほしいです。ドアを開放するなど（1年・男）
- 短期留学でも補助金が出るといい。第二外国語の留学も充実させるべき（?・?）
- 留学先の選択肢がもっと多くてもいいと思う（3年・女）
- 活動があまり伝わってこないの、PRに力を入れたいと思います（3年・女）
- 国際交流のイベントをもっとわかりやすく広告してほしい（3年・女）

*アンケートは、5月に実施されました。歴史学の授業での配布、各学科1から3つのゼミでの配布、2つの語学系ゼミでの配布、いくつかの団体への配布、その他商大生への配布を行い、合計200名の回答を得ることができました。ご協力ありがとうございます。

チューター制度って何？っていう人のためにもう一度おさらい。

チューター制度とは？

- チューター制度は、日本の大学に在学する外国人留学生の家庭教師として、また大学での学友として留学生の本学での学習・研究生生活を支えるものです。

具体的に何をやるのか？

- 留学生と友達になり、予習、復習など学習の援助をします。
- 日本語の理解、会話、日本語能力検定など、日本語を上達させる援助をします。
- 空港への出迎え（自家用車の出迎えは禁止）、市役所へ同行し外国人登録や国民健康保険の加入手続き、銀行口座の開設、電話契約、宿舎探し、学内外の案内、買い物の

手伝い、その他複雑な手続きが必要なとき（ガス、水道、電気代等の自動振込など）の援助をし、日本での生活の相談も受けます。

チューター料の支払いについて

- チューターには、1時間900円の謝金が払われます。
- 1か月の勤務時間は・・・
- 1年目の留学生担当：20時間以内 2年目の留学生担当：15時間以内 3年目の留学生担当：12時間以内

詳しくは、国際交流センター事務室で聞いてね！

ベロメストノワ

マリーナ

Belomestnova Marina Alexandrovnaさん

交換留学生(3年) 出身国:ロシア

“日本が大好き、みなさんもっと交流しましょう!”



↑上はマリーナさんの生まれ故郷であるウラジオストク、下は小樽の写真です。「写真を撮ることが趣味」と言うマリーナさん。本当にとてもきれいな写真です。

「日本が大好き」と上手な日本語で語るマリーナさん。「子供のときから日本の文化が好きでした。着物や生け花、芸者などに興味がありました」そんなマリーナさんは4年半かけて日本語を習得したといいます。「日本でホームステイをしたり、旅行に来て(ロシア人の)友達の通訳をしたりしました」ロシアの大学では日本語学を学び、現在、交換留学生として商大に来ており、5月21日でちょうど1年を迎えます。しかし出身国のロシアと日本の文化はかなり異なると思われますが、戸惑うことはなかったのでしょうか。「日本に来て困ったことはありませんでした。友達もできて、すぐに日本の生活に慣れました」チューターにも助けられ、不自由することはなかったといいます。商大の印象は「自然が多く、大きな図書館があり、静かでとても環境が良いと思いました。商大生もとても優しくて親しみやすいです。でも男の子はシャイですね。(男女問わず)もっと仲良くしたいです」マリーナさんは商大に来てとても充実した毎日を送っています。「部活は、バドミントンと社交ダンスをやっています。バイトもしていて、今年から(商大付近の)イタリア料理店で働いています。最初は緊張しましたが、もう慣れて今は楽しいです」そんなマリーナさんは、将来日本に就職したいと考えています。「日本に来てからもっと日本が好きになりました。(交換留学なので)一度ロシアに帰ってまた日本に戻って来たいです」*インタビューは5月上旬に行われました。

MESSAGE:「もっと日本人の学生とも仲良くしたいです。男の子も女の子も仲良くしましょう」

留学生インタビュー

Interview

普段は聞くことのできない留学生たちの生の声をお届けします。



「子供のころから遠い所に行きたかった」というラオさんは高校時代、香港に留学していました。その経験を経て「アジアが好きになった」といいます。そして、将来発展するのはアジアであると考え、制度の充実している日本の大学に留学を決めました。1年間は東京外国語大学で過ごし、その後に商大に入学しました。その理由は「日本語をもっと使いたかったから」東京外大では会話はほとんど英語でした。しかし日本に来たのだから日本語を使いたい、ということで先生に推薦されたのが、都市に近く英語力が高い大学である商大でした。商大は「人が少ないので先生と直接話せる」また、「気軽にいろいろな人と話せる」という所が気に入りました。「人との会話が好き」というラオさんにとって、とても良い環境だったようです。また、ラオさんは商大に来て、とても多様な活動をしてきました。国際交流サークルや社交ダンス部、ゴルフ部に所属し、さらに皆さんもご存知『ラオズカフェ』*の経営に携わりました。「『日本での外国人によるビジネス』というテーマに興味があったので」授業やゼミでビジネスについて学び、それを実践しました。良い経験になり、楽しかった」将来も「まだはっきりとは決めていませんが、メキシコに帰り、学んだものを生かしたビジネスをしたい」さらに国際交流を生かして、それを他国と協力した友好的なものにしたいと言います。「そのためにもっと勉強したい」

*「ラオズカフェ」・・・学生会館2階の生協に隣接するカフェ。2007年11月からウェンセスラオさんの意見で本格メキシコ料理が楽しめるカフェに。現在、ラオさんは勉学に励むため活動をしていませんが、多くの仲間たちによって受け継がれています。

MESSAGE:「留学だけでなく海外に行くべきだと思う。外に出てから自国の文化や立場を見直すことができると思う。考え方が変わります。僕も留学したことで、自分のアイデンティティを発見しました。また、文化が違って同じ気持ちがあることをわかるようになりました」



↑左は以前からカフェを営んでいた渋谷恭子さん。「とてもお世話になった」といいます。

マンザノ

ウェンセスラオ

Manzano Wenceslaoさん

大学院生 出身国:メキシコ

“考え方が変わった、文化が違って同じ気持ちがあることに気付く”



きん せいこ
金正虎さん

学部生(4年) 出身国:中国

“国境線を越えるビジネスを目指す、やる気を出せば道は見えてくる”

1年生から学部生として商大で学んできた金さん。「中学生くらいのときから日本が好きでした」そんな金さんは、日本語学校を異例の1年間(通常2年間)で卒業し、日本にて調理師学校での学修を経て、商大に入学しました。「経済大国である日本で経営の知識を学びたかった」周囲のアドバイスを受け商大に決めました。「北海道は地元と似ているので異国という感じがしませんでした。商大も環境のいい学校だなと思いました」そして、金さんにはもうひとつの顔が。「料理店の店長をしています。大学で学んだことをすぐに実践できて、学んだことを実感したり、違うなと感じることもあります」また、中国人留学生学友会の副会長を務め、イベントの企画や運営に携わり、日中の友好のための活動にも参加してきました。活動の幅が広い金さんは交流の幅も広く「積極的に話しかけるようにしています。友達を大切にしたい。一度会ってさよならではなく、ずっとつながっていききたい」一つ一つの出会いを大切にします。留学して「考え方や、世界を見る視点が変わった」といいます。そして、金さんは「商大で学んだ経営や貿易を生かし国境線を越えるビジネスをしたい」という夢を持っています。「目標を持って頑張ることによって、確実にそれに一步一步近づくことができ、新たに自分の進む道の選択肢を発見することができると思います」



(上) 一昨行われた「英語で落語」の写真。(下) 商大の中国人留学生で積丹半島まで旅行に。



MESSAGE:「私は留学生として日本に来て、基本科目はもちろん、言語科目に特に力を入れてきました。そのおかげで、多国の友人を作ることが出来ました。日本人大学生の皆さんも本大学に言語センターと言う部署を設けており、外国人の先生方もいらっしゃいますので、やる気を出せば、いくらでも話せるようになると思います。日本と言う国は国際貿易が盛んであるので、多国語を話せることで、就職にあたって有利になると思います。又、本大学には学科ごとに優秀な先生方が大勢いらっしゃいますので、自分さえ覚悟出来ていれば、より深い知識を習得できると思います。私は本大学に入学出来たことを嬉しく思うし、いろんな知識を習得できたことで充実感を持つようになりました。皆さんも本大学に入学して本当に良かったと実感できるように頑張ってください」



▽海雲台(ハウンデ)海水浴場
出身地の釜山では、海水浴場が観光地として有名だそうです。

「ホテルを建てるのが夢です。商大での勉強を、将来の仕事につなげたいと思っています」というアンさんは、商学科の二年生。妹(同大学四年生)のもとに遊びに来たことがきっかけで小樽が好きになり、日本語を勉強しようと思い始め、札幌の日本語学校での九カ月やアルバイト期間を経て、商大に入学したそうです。

「初めて商大に来たときは、真面目な学生が多いなあという印象でした。韓国の大学では、昼間にサボってベンチでおしゃべりをする子も結構いました」

日本語がとても上手なアンさん。日本語は勉強というより、実際に使いながら感覚で身に付けたそうです。「(語学力は)その国に行けば必ず伸びると思っています。通じなくて悔しかったり、損をすることもたくさんあったけれど、勉強になりました」

商大での生活は、授業をはじめ、社交ダンスサークルでの活動や、アルバイト、寮の友人との時間など、とても充実しているそうで、趣味は「料理を作ったり、日本映画を観たり・・・おいしいものを食べに行くのも好きです」とのこと。日本の食文化にも慣れ、料理が一人ずつ分けてあるところも気に入ったそうです。「留学して良かったと思うことは、視野が広がったことですね。色んな人がいるということがわかってきて、人との接し方が変わり、(交流の)範囲も広くなりました」

MESSAGE:「小樽商科大学は、国際交流が盛んといわれますが、日本人(学生)の立場としてはそうは思っていないみたいです。外国人から近づけないときに、日本人からきてくれるとありがたいです。迷惑だと思わずに、留学生に近寄ってきてくれたらすごくうれしいなと思います。そうすれば、もっと国際交流できる学校になると思うんです。自分からちょっとだけ勇気を出せば、(留学生は)皆優しく対応してくれると思うので、皆で仲良くなって皆で学校生活をしたいです」



アン・ギョンミさん

学部生(2年) 出身国:韓国

“視野が広がる、この経験を将来に生かしたい”

国際交流はココでできる！

国際交流をもっと深めたい！もっと交流したい！そんなあなたにこれから行われるイベントを紹介するよ

潮まつり

7月
25・26日



毎年、留学生たちが一緒にねりこ
みに参加するよ！留学生のみんな
に日本のお祭りを紹介しよう！

交換留学生フェアウェルパーティー

8月5日

フェアウェルパーティーは8月でさよならする留学生た
ちのお別れパーティ。みんなで感謝の気持ちを込め
て送り出そう！毎年多目的ホールで行われます

ウェルカムミーティング

9月29日

商大にやってくる新たな仲間を歓迎しよう！参加すれば仲良くなれるはず！昨年はラオズカフェで行われました。近くなると掲示板に張り出されるので要チェック！



国際交流週間

10月下旬

商大でもっとも大きな国際交流イベント週間。出身国紹介のパネルが展示されたり、日本文化体験会、留学報告会、留学生とのスポーツ大会、そしてハロウィンパーティもあります！誰でも参加OKです！留学生と交流を深める大チャンス！ぜひ参加してみよう♪



その他、「国際交流ラウンジ」や「国際交流センター」を活用してもっともっと交流を深めよう！

国際交流サークルってどんな活動しているの？

代表山田亜季さんのお話：「国際交流サークルは1、2年が中心になって、主にイベントの企画・運営をしています。お花見、花火、学祭での出店、そして一番大きいイベントである10月下旬の国際交流週間の企画も行っています。今年は特に、イベント盛りだくさんの年にしようと考えています。今年5月には初めて交流週間以外の日程におけるスポーツ大会を実施しました。しかし、どうしてもサークルのメンバーが多くなり、一般の学生や、留学生の参加が少ないというのが現状です。このサークルは、一般の商大生と留学生の交流の場を提供することを目標としているのですが、今の段階ではイベントが留学生とのつながりを持つきっかけになっていないことがあるので、それを今後の課題としていきたいです」これからの更なる活動に期待！

さまざまな国際交流のカタチ☆

～「国際交流」で“貢献”～



小樽商科大学国際ボランティア団体「ONE」

今年3月に結成された新しい団体「ONE」はイベントを企画・実行し、集まったお金によるカンボジア支援を目的として活動を行っています。チャリティコンサート、Tシャツデザインプロジェクト、チャリティクッキングなどを行いました。一人一人が幸せになる手伝いをすることを目的に活動しています。

代表の遠藤 真彩さんから：「世界を変える事は出来ないが、誰か1人の人生を変える事は出来る」。目を向けるべき対象である「1人の個人」の意味で、コンセプトならびに団体名は「ONE」です。ONEは、やろうと思えば無限にやる事が有り、やりたくなければそれはゼロという環境。その中で自発的に動く仲間と接していると、行動したくてたまらない気分になります。ONEは頑張れる場、成長できる場、挑戦できる場、熱い仲間に出会える場。燃えたい人はONEへ(^^)！

詳しくは→<http://sky.geocities.jp/ouc20090301/>

日本語ボランティア

留学生向けの授業「中級日本語」などの授業では、日本語教育ボランティアが活躍しています。市民ボランティアグループ「アオバト」の会員の方が毎週授業のお手伝いをされており、主に会話や口頭練習の相手をされています。「アオバト」は、数年前に商大OBさんの「商大の留学生の、広い意味での日本語教育に貢献したい」という思いから立ち上げられた団体なのです。

フェアトレード

生協で7月に行われていた「フェアトレード・フェスタ」を覚えていますか？これも学生団体によるものでした。

「フェアトレード」とは、公正貿易の意味で、途上国の生産者と先進国の消費者が対等な立場で貿易を行う形です。途上国では、不当な賃金で、厳しい労働環境の中働いていることが少なくないのです。少しでも生産者の生活向上を図り、格差のない幸せな社会を実現させるための身近な海外協力といえます。そして、各国特有の伝統や文化を交流できるきっかけにもなります。フェアトレード商品に注目してみましょう。



～留学生OBの深い話～

フランス語担当の高橋純先生からお聞きしました。 出張先の東京で、ある会議の席で出会った長崎外国語大学の先生と話をしたところ、現在長崎外大で教えているフランス人の教師は小樽で暮らしたことがあるというのです。名前を尋ねるとシリル・リシュ(Cyril RICHOUX)。彼はかつてフランスの協定校エクス＝マルセイユ第三大学からの交換留学生として本学で1年間過ごしたのです。当時、私は国際交流センター長をしていたので彼のことをよく知っています。彼はヨーロッパからの交換留学生としてはずいぶん日本語が達者で、その頃からいずれは日本に戻ってフランス語の教師として働きたいと話していました。小樽商大の留学生が夢をかなえて日本に戻ってきたというお話です。

シリルさんからお話を聞くことができました。

今の就職先のことですが、留学の経験の際、日本にもう一度戻ってきて社会人として住んでみたいと思ってはいましたが、まだ労働経験不足で、他の国でも構わないと考えており、初めは他の国に行く予定でしたが、事情がありキャンセルになりました。ところが勤めている長崎外国語大学の求人があると聞いて申し込み、運がよくて選ばれました。今はどうみても、他の国ではなくて日本に就職して本当に良かったと思います。

小樽商科大学での留学経験といえば、まず本当に留学生のことを考えてくれる大学で驚きました。心より感謝の気持ちでいっぱいです。YOUCプログラムも非常によく考えられたと思います。まず英語でさまざまな科目を学んで、日本語をまだ習得していない留学生も最初から勉強ができ、日本語の授業もかなり細かいレベル分けで自分の合ったレベルで上達が予想以上に速かったと思います。さらに日本語で一般の科目も選ぶことができ、短期留学なのに学部生の気持ちで勉強もできた気がします。国際交流会館も大変満足でした。日本人の学生も教職員も温かくて、親切にしてくれました。海外でも、日本でも、まだ連絡を取っている友達がいるので、私の世界を広くしてくれた経験です。そして旅行・スキーの授業・祭りやイベントなどを通して日本の景色と文化と触れることがで

きました。つまり最高に豊かな日本の経験だったと思います。

今の就職で感じたことはやはり日本の社会人は忙しいと思いました！それは半分冗談ですが、フランスの教員の労働時間と比べましたら実際に2倍以上です。しかし日本の企業の考え方には私の心と合っているところがあるようです。まず自分勝手の仕事のみではなく、勤めている部課・コース・大学・会社を全部考えなければならず、義務感をよく感じています。そのお陰で自分の仕事に意味があると考えています。それはフランスで働いた経験との大きな違いです。

国際交流といえば、国が行う交流も人が行う交流もあります。人に関しての「国際交流」は、他の国と触れた際に恐れず知ろうとする、理解しようとすることでしょう。そして機会があれば自分の国・文化などを知らせることだと思います。しかしそれよりもまず他国の人と話すことが最も大切だと考えます。したがって、自分が考える国際交流と自分の仕事の間にはやはり密接な関連があります。外国語(フランス語)の教員として、まさに国際交流のもとになる国際理解を求めています。具体的に日本人がフランスの言葉に壁を感じなくなり、フランス人の考え方を理解できるようにする為にも教えています。

シリル・リシュ

OBさんインタビュー

なかつがわ まさのぶ

中津川 雅宣さん(2008年 本大学卒・2009年 本大学院修了)

英語を通じて世界を広げてほしい

大学1年生から通訳のアルバイトを経験され、大学院では英語科教授法を研究された中津川さん。「どうしたらそんなに英語が得意になれるの？」

“中津川さんと英語”について取材しました！

☆「宝物にするよ！」がきっかけで

「中学1年生から3年間、道が主催の『ジュニア・アートキャンプ』に参加しました。9カ国からの参加者と3日間、各国グループに別れてアートを通じ国際交流するというイベントです。最初は英語が全く話せないのに、無理やり親に…。中学3年生の時、別れ際に同じグループのアメリカの女の子がプレスレットをくれたんです。その時に『宝物にするよ』と言いたかったのですが、『宝物』という単語がわからなくて。通訳の人にきいたら『Treasureだよ』と教えてくれて、その時『通訳ってすごいな』と思いました。それが最初に英語に興味を持ったきっかけだと思います」

☆**通訳の仕事の魅力** 「大学に入ってから、友人の紹介で通訳の仕事を始めました。ノルディックスキー世界選手権、世界バレーなど、国際大会通訳の他、ローリングストーンズ来日公演の通訳や、各種講演会の通訳もしました。昨年の洞爺湖サミットでは、米国政府報道関係の通訳を務めました。通訳の仕事は、準備や仕事内容は非常に大変ですが、色々な人に会え、自分の知らない世界を知ることができるのでとても面白いですね」



インターナショナル・ユース・エクスチェンジin HOKKAIDO (元ジュニア・キャンプ)に通訳として参加



アメリカの女の子からもらった思い出のプレスレット

洞爺湖サミットの通訳で身につけたロとパッチ



☆**まずしゃべってみる** 「いつも『どうやって英語を勉強したんですか?』ときかれるのですが、通訳の勉強以外、特別な勉強をした記憶がないんです。アートキャンプに参加した時から、勉強として英語をとらえていないのかもしれませんが。中学・高校の時は、いつも英語の点数は悪かったのですが…。ネイティブスピーカーだって間違った英語をしゃべる時があるんですから、習ったら恥ずかしがらずに口に出してみることで」

☆**将来にむけて** 「将来学問としての英語というより、英語を通じて色々な経験ができるんだよということを伝えていきたいです。英語がなかったら、国際交流も、通訳をするなかで多くの方にお会いすることもできませんでした。そんな喜びを英語教授法という学問を通して、多くの学生が英語を使えるようになり、僕のような経験をしてもらえたらいいなと思っています」

——「英語が好き、英語をもっと勉強したいという学生を応援したい」と中津川さん。学生との年齢が近いので、気軽に色々英語のことや留学のことなど相談できそうです。中津川さんは8月上旬に英語教授法の勉強のため、アメリカ・南イリノイ州立大学院に入学予定。それまでは、非常勤で言語センターに勤務していらっしゃるの、留学のことや通訳の仕事など聞きたい時やお会いしたい時は言語センターへ。それ以降連絡をとりたい方は、編集員までご連絡を。(佐藤亜美)

国際交流センターから

現在、商大には14の国と地域から約60名の留学生がいます。その一方で、小樽商科大学は12の国にある19大学と協定を結んでいるので、これらの国へ皆さんが留学することができます。

協定大学に留学してみたいという方は、できるだけ早めに国際交流センターに来て、留学実現に向けた話し合いをしましょう。留学にはある程度の準備期間が付きものです。また、商大から留学できる国や大学については、毎年協定大学と打合せてから決められるので、募集枠が増減することもあります。留学に興味がある方は、まずは、国際交流センターにお越しください。

その他、留学生と知り合ってみよう(チューター制度)、留学生が多くいる授業と一緒に学んでみたい(国際交流科目)など、国際交流に興味がある方も、国際交流センターへお問い合わせください。事務室は4号館の入口の側にあります。

最後にお知らせですが、毎年10月の最終週は「国際交流週間」として、様々な国際交流イベントを開催しています。最終日の10月30日(金)には、日本人学生、留学生、地域の皆様が交流する場として、国際交流パーティーを企画していますので、ぜひ参加してみてください(詳しい時間などは9月以降にお知らせします)。皆さんのご参加をお待ちしています。

100周年に向けて

COLUMN

第5回 キャンパスを「緑丘」色で

前回のコラムでは、1911年から1935年までの歴史にスポットを当て、創立後、瞬く間に成長を遂げた小樽高商についてふれました。今回は、本学が小樽高商（1910年—1944年）から小樽経済専門学校（1944年—1949年）、そして小樽商科大学（1949年—）へと姿を変えた25年間、1936年（昭和11年）から1960年（昭和35年）までの時代を取り上げます。また、緑丘会館やOGへのインタビューなど、時代を超えて取材を行いました。

1. 序

「商大を一言で表すと？」

という質問を、学生企画事業実施小委員会（百周年の企画委員会の一つ）が聞いてまわったそう。私だったら、「緑丘」と答えただろう。

この時期、地獄坂を登って正門の前に立つと、目に飛び込んてくる鮮やかな緑色。キャンパス中に広がる緑色と、キャンパスを囲む山々の緑色が、一年の中で最も印象に残ると感じる人も多いと思う。商大は地獄坂を登り切った小高い土地にあるので、思わず「緑丘」と呼びたくなる。

「緑丘」という言葉が本学の歴史に登場するのは、1925年。この年創刊された学生新聞『緑丘』で使われたのが最初と言われている。（※1）本コラムでも度々引用するように、本学の歴史を知る上で重要な資料だ。以来「緑丘人」や「緑丘スピリット」と用いられる。「商大」ではなく「緑丘」で表現するのは、「緑丘」にこめられた特別な気持ちがあるからだろう。

また「緑丘」のイメージは、学生歌の中でも歌われている。

「琅玕（ろうかん）融くる 緑丘の」は学生歌の一つ、「若人逍遙の歌」の最初の歌詞だ。いつだったか、「琅玕は、翡翠のこと。その翡翠が融けたような緑色のこと」と、「若人逍遙の歌」を歌う前に、教えてもらったことがあった。

「私たちの頃は、前庭に芝生が一面に広がりポプラの木が立っていて、そこによく寝転びました。そこから見える海には浪漫を感じましたね。今は何もなくなってしまっただけで

す」と、当時を語ってくださったのが、OBの井上さん、横井さん、馬場さん、桶谷さん。旧校舎の時代に広がっていた前庭は、歌にあるように、琅玕が融けて辺りを覆ったかのような、青々とした芝生が広がっていたものと想像される。前庭で校歌や応援歌を先輩から教わったり、硬式テニスをしたりと思い出は尽きない。テニス部でコーチ役をしてくださったスミス先生との思い出話も、齋藤さん、桶谷さんからまた後日伺った。先生の部屋でオペラを聴きながら、寒い日にはウィスキー入りのホットミルクを飲んだことや、先生がアメリカに帰るため留守番をした話など。



「緑丘」と聞いて思い出すものは、その時代、その人それぞれで違っているだろう。思い浮かべる色もそうに違いない。このコラムでは、「緑丘」の色も探してみたい。

2. 緑丘の懸け橋（1936年—1940年）

1935年、苦米地英俊校長が第三代目校長になり、それ以降、日中戦争が本格化する中で、校内の思想的な引き締めが始まった。1930年代、文部省は度々出版法で発売・頒布禁止になった図書について、各大学・高専の図書館にそれらの図書閲覧禁止を指示した。（※2）また1939年には小

※1：小樽高商史研究会編、『小樽高商の人々』、小樽商科大学、2002年、pp143—144

※2：小樽高商史研究会編、pp218—219

樽高商でも断髪令が発せられ、これに従わない学生は登校を禁止するという、厳しい姿勢がとられた。(※3)

しかしこの時期、1939年に「小樽高商同窓会」が社団法人「緑丘会」に改組され認可されたという出来事もあった。

「緑丘会」は、地域間、年代を超えて交流できる大切な場である。しかしこの時はまだ、実際に「緑丘会」を通じて交流ができる「場所」はなかった。「緑丘会館」が建てられたのは、それから約40年後、1980年(昭和55年)だ。



左から、桶谷さん、
井上さん、馬場さん
(3月19日撮影)

左から、齋藤さん、
桶谷さん
(4月3日撮影)



緑丘会館は東京池袋サンシャシンの57階に位置する。この会館の実現には、委員会を中心に様々な苦労があったようだ。その一つが、資金調達。企業献金ではなく、同窓基金による「自前」での実現こそ、“後の世代へ語りかける唯一のコミュニケーションであろう”(※4)という意見や、これから長く利用する若い会員にも、小口でもよいから多数の参加を期待したい(※5)という願いもあったそう。



寮生OB会
(東京玉の井会)
(5月4日撮影)

現在、緑丘会館が大いに活用されていることを、緑丘会事務局の齋藤さん、桶谷さんからお話いただいた。先日行われた、「ホームカミングパーティー」や「緑丘会通常総会」の他、同窓会や部活の交流会など幅広く利用される。

このように同窓生にとって無くてはならない「緑丘会」。

しかし今、「緑丘会」に大きな悩みがある。若い会員の人数だ。現役生にもっと「緑丘会」について知ってほしいとお二人。「良い先輩に出会え、非常に頼れる同窓会です。同窓会は綿々とながらでいて意味があります。現役生にも卒業後、是非この輪の中に入ってもらい、太く長いネットワークを築けたらと思っています」

そんな「緑丘会」が年2回会員に送る会報『緑丘』は、今の大学や学生の様子を伝え、会員同士の消息を知らせている。この会報の袋詰め作業が実は東京の「緑丘会館」で行われるのだ。20名ぐらいの会員が、およそ6千部の会報を朝11時から途中休憩を挟み、15時ぐらいまでかけて行う。この袋詰め作業で集まり、昔自分の家庭教師をしていた先輩に40数年ぶりに再会したという、思いがけない出来事があったそう。

桶谷さん、齋藤さんは、「商大の同窓会の特徴は、他の総合大学が学部ごとの同窓会ですが、本学は学部が一つのため、実質的には大学の同窓会です。このためより一体感が得られる同窓会だと思います」と「緑丘会」について話される。「緑丘会」は、学生と商大とを結ぶ懸け橋として、そして世代を超え同じ緑丘で学んだ学生をつなぐ懸け橋として、百周年を目前にさらにその役割を果たしてくれるにちがいない。

新入会員歓迎パーティー＝
ホームカミングパーティー
(5月30日撮影)



緑丘会 通常総会風景
(6月13日撮影)

3. 緑丘に歌が響く日(1941年－1945年)

街頭インタビューをしていた時、サンモール一番街で、あるご夫婦に質問をしていた。質問が終りお礼を言おうとすると、「あー、あなたは商大の学生さんなんだよね」と向こうから話かけてくれた。「はい」と答えると、「私の兄も商大

※3:小樽高商史研究会編, p230

※4:浅野嶽一,「同窓百年の計,あり」,『緑丘』,49号, pp4—5

※5:特集「緑丘会館の実現に向けて」,『緑丘』,48号, p32

※6:小樽高商史研究会編, p230

でね」と旦那さん。「そうなんですか?」「でも戦場で病死してしまって」「……」「生きていたら、今はどんな感じなんだろうなと思いますね」

戦争を経験していない私たちの世代の中には、戦争に対して無関心、というよりも目を向けない人も多いと思う。目を向けるのは辛いけれど、今という時代がどのようにこうあるのか、今の緑丘がどのような歴史をたどってきたのか、向き合う必要がある。そのご夫婦に出会い、自分もそむけてはいけなかったと思った。

1941年(昭和16年)12月8日、日本は米英に対し宣戦布告、太平洋戦争が始まった。同年、9月には文部省から大学での繰り上げ卒業が指示され、10月には徴兵延期期間の短縮が決定していた。当時三年制であった本学でも、卒業式は3月ではなく12月に行われ、学生は貴重な学生生活の一部を奪われることになる。(※7) この昭和16年にOBの井上さんは入学をしている。「今は、もっと学生時代に勉強しておけばよかったと思います」と井上さん。しかし戦争がなければもっと勉強をし、そして友人との思い出をつくれたはずだ。

本学には、特攻隊員として戦場に飛び立った学生が少なくとも10名近くいると考えられている。道場七郎さん(昭和15年卒) 牧野顕吉さん(昭和17年卒) は、本学最初の特攻として知られる。



道場七郎さん(左端)

毎日新聞社発行
『別冊1億人の昭和史』第4巻
「特別特攻隊」より

道場さんは戦死する2カ月前に伯父宛てにハガキを送った。それが本学に残っている。「全てが変わりつつあります。一億火の玉となって立ち上がりつつある姿を頼母しく思ひます。私自身弾丸ともなりて敵にあたって碎けたい気持ちで一杯です」と書かれていたそう。(※8) それから2ヶ月後の道場さんの写真が残っている。今まさに出撃する前の姿だ。まるで、その日もいつも通りに訓練に行くかにも見える。この写真は、小林芳美さん(昭和16年卒)が『緑丘』(61号)で紹介してくれたものだ。

また牧野さんはその歌声を人々の心の中に残し、飛び立った。昭和19年12月17日20時に放送された、日本放送協会「前線に送る夕べ」のラジオ番組で、「護国隊」隊員の出陣前夜の決意表明があった。その中で、牧野さんが祖国と肉親との別れを告げて唄われた「江差追分」が流れた。牧野さんは15時30分にレイテ島で特攻攻撃をしている。

(※9)



牧野顕吉さん
(『緑丘』60号より)

「戦争末期のラジオ放送の中で、江差追分を唄って特攻に出撃した兵士は、小樽高商の学生だったらいいと書かれていたが、その学生は、私どもの同期の牧野顕吉君のことである」(※10) と同期の方は会報『緑丘』で書かれている。昭和52年、特攻護国隊の出撃記録の特集番組に協力されたその方は、番組を見た方から手紙をもらい、「戦場が日に日に激化していった当時、その番組が多くの銃後の国民に感銘を与えていたことを知った」そう。(※11)

追分をラジオの前で聞かれていた牧野さんの姉・丸田むら子さんは、「かねてこの日あるを覚悟していたとは言え、十二月十七日夜あの子の肉声を耳にした時、その声のあまりに行ける日さながらなので、とうとう我を忘れて声をあげて泣いてしまいました。最後のききなれた江差追分はとりわけ腸に沁みわたりました」(※12) とその時の気持ちを残している。

高商時代の牧野さんについて、同じ硬式庭球部の同期生の話から、牧野さんの「いい勉強になったじゃー」「すまんかったじゃー」という、語尾に「じゃー」をつけるしゃべり方で慕われていたこと、テニスにとっても打ち込んでいたことが伝わってくる。またその方とは、卒業十五年後に再会し、お互い思い出を語ろうと堅く約束したそう。(※13)

8月15日、戦争で若くしてこの世を去った347人のOBを哀悼する慰霊祭が毎年行われている。「緑丘会」によって建

※7: 小樽高商史研究会編, pp243—244

※8: 小樽高商史研究会編, pp243

※9: いつまでも戦争を忘れない小樽教師の会, 『追分の謡消えず』, pp15—16

※10, 11: 中島泰明, 「牧野顕吉のこと」, 『緑丘』, 60号, pp66—6770

※12: 丸田むら子, 「弟を偲ぶ」, 『追分の謡消えず』, pp39

※13: 湊恭, 「思い出の記」, 『追分の謡消えず』 pp59—61

てられた「戦没者記念塔」の前で、参列者はそれぞれの思いを胸に手を合わせ、本学グリークラブは、この日、花とともに学生歌を贈る。緑丘に歌が響き渡るこの日、「先輩にはもう一度この景色を見てほしかった」そう思えるほど、8月半ばの緑丘はきれいである。

4. 緑丘に新たな風 (1942年—1960年)

戦後、教職員・学生が緑丘に戻り、1945年に最後の繰り上げ卒業をする一方で、一年生の募集や復員学生の募集を行った。選挙に出馬を決めた苦米地校長に変わり、浜林生之助先生がしばらく校長事務取扱を務め、大野純一先生が、第4代校長に就任した。1944年に小樽高等商業学校（小樽高商）は、小樽経済専門学校（小樽経専）に転換されたが、その後まもなく大学昇格運動を経て、1949年、小樽商科大学に昇格した。大野校長は初代学長として就任される。（※14）

この大学昇格の2年前1947年に、本学では男女共学を実施し、3名の女子学生が入学した。その一人河田照子さんは「共学制度の是非論のテスト・ケースとして注目されていたので、行動にも言語にも何か目に見えない制約をうけて、伸び伸びとした意識を長い間持てなかったのが残念でした」（※15）と当時について話している。しかし学生生活は運動会など、色々な思い出ができ楽しかったようだ。また「思いがけない所で先輩のお世話になったりかつての先生方にお会いしたりして、やっぱりこの学校を出てよかったとしみじみ思っております」（※16）

河田さんが入学されてから30年、40年経つと、大学の雰囲気もだいぶ変わる。OGの福井さん（昭和54年卒）竹内さん（平成元年卒）の学生時代も、今のように半数近くが女子学生ではなかったものの、お二人は口を揃えて「女子学生だからという特別な扱いはなかったように思います」

「私の頃は、285人中31人が女子学生で、その頃はまだ



左から
福井さん、竹内さん

新旧の建物が入り混じっていました。今の4号館の隣に旧プールがあって、私たち女子が着替えできるところがなく、空き教室を使い、交替で見張り番をした思い出もあります。まだ学生寮もあって、ちょうど女子学生が入寮したことが問題になっていた時期でした」と福井さん。他にも女子トイレが隔階にしかなく、設備の面では少し不便な思いをしたこともあるそうだ。

また竹内さんは、「380人中80人ぐらいが女子学生で、私が卒業する時には100人ぐらいの女子学生が入学していたと思います。当時は女子バスケ部がなく、私は男子バスケ部のマネージャーをしました。けれど、マネージャーではなく、部員の一人として受け入れてくれ、また部員の一人という意識でみんなと部活をしていました」部活の打ち上げで、円陣を組み若人遣通の歌を歌う時は、もちろん竹内さんも一緒に。胴上げをされたこともあったとか。

坂の上に大学があるので、小樽のお店に立ち寄るのは放課後だったそう。小樽は楽しくてしかたがなかったという。お二人が実際に足を運んだ思い出のお店を紹介してもらった。「小樽公園の近くの“ミルクファーム”に放課後行きました」「喫茶店“オランジュ”では、アップルパイやミートパイが熱々で出て来るんですね。私はそのパイ目当てに行きました」「静屋通りでは、“叫児楼”ですね。蔵で狭いんです。私は何か嫌なことがあるとあそこに友だち二人でこもっていました。あそこはパスタだけでなく、ウイスキーがショットで飲めたんです」「商大を下り、分岐路を右手に曲がって降りると、“Savoia（サボイア）”という喫茶店があって、そこでサボっていました」「元国際ホテルの1階にあった素敵な、ちょっと大人の雰囲気のカフェ“ロートレック”では、手作りのケーキとコーヒーが美味しかったです。女の子はよくそこへ行きましたね」お二人が友だちと小樽市内を食べ歩いていた姿が目につく。



今はもうお店を閉じられている、喫茶店“Savoia”。
可愛いこじんまりとした
雰囲気。

※14：小樽高商史研究会編，pp261－262

※15，16：『緑丘50周年史』，小樽商科大学，pp282－283

「現役生の皆さんは分からないかもしれないけれど、“商大だから”という気持ち，“商大生としてのプライド”というものは、卒業してからきっと分かると思います。頭の片隅に置いておいてもらえると嬉しいですね。商大の4年間は自分の中では大事なものになっています」と福井さん。

「何でもいいから皆さんにはチャレンジしてもらいたいです。講義が終わったら疲れて帰ってしまうのは、勿体ないです。“4年間でこれをやった”というものがあるといいですね」と竹内さん。「緑丘」には福井さん、竹内さんのようにエールを送ってくださる先輩がたくさんいる。

男女共学の実施から65年が過ぎ、大学の雰囲気もガラッと変わった。勉強だけではなく様々な分野にチャレンジし活躍する商大生。「緑丘」には常に新しい風が吹いているように思われる。



5. 結び

「緑丘」を色で表現したら何色だろうか。コラムを書き進めながら「緑」「深緑」「青」のように1色では表せないことに気がついた。「緑丘」はまるで山や森のように、様々な色が集まって一つの色を成しているように思う。7色で一つの虹の色には、「虹色」という表現がある。「緑丘」も同じかもしれない。「緑丘」は個性豊かな学生一人一人が集まって「緑丘」。目に見えない商大の長い歴史も「緑丘」の一部。そしてその場にいないけれどもいつも母校を思うOB・OGがいて「緑丘」。「緑丘」は、どこかの文房具店にも売っていないけれど、「緑丘」色と言うのがいいような気がする。「緑丘」色は具体的に示すことのできない「色」だ。そして時代を経てその「色」は変化する。しかし変化しつつも、その「色」には変わらない色味があると思う、それが伝統かもしれない。

サマセット・モームは『人間の絆』で人生をペルシャ絨毯

の織物に例えたが、人生はまた絵を描くようにも思える。高校の美術の時間で、アクリル絵の具を使った絵を描いた時、最初にキャンパスを黄色一色に塗りつぶした。これを下塗りと言い、下塗りをすると、後で描く絵に一層深味がでてくるそうだ。

人生を絵に例えるなら大学生の時期は、下塗りの時期かもしれない。「緑丘」色に下塗りされた私たちのキャンパスにこれからそれぞれの絵が描かれていく。どんな絵にするか、どんな色にするかはもう大学入学前に構想しているかもしれない。しかし、たとえ決めていたとしても、これから社会に出てから、その絵や色はいくらでも変えることができる。10年、20年たって「緑丘」色がすっかり見えなくなった頃、その色の上に描いた絵に様々な色が重ねられ深みを増し、また生き生きと鮮やかなのに気づくだろう。夏、商大のキャンパスが文字通り「緑丘」になるように、4年生の私は人生のキャンパスを「緑丘」色に塗り終えたい。

(佐藤亜美)

ご協力いただいた皆様

- ・OBの井上哲夫さん(昭和18年卒)
- ・横井久さん(昭和32年卒)
- ・馬場浩さん(昭和36年卒)
- ・齊藤慎二さん(昭和40年卒)
- ・桶谷喜三郎さん(昭和41年卒)
- ・福井美美子さん(昭和54年卒)
- ・竹内利美さん(平成元年卒)

皆様どうもありがとうございました！

何がで"る"かな? 先生のお気に入り!!

和田 健夫 副学長

テーマ
スポーツ



Andante (歩くようなはやさ) がびったりの、和田先生。そう感じるのは私だけではないはず。あっちに寄り道してふらふらした足取りに、突然急ぎ足になるという歩き方ではなく、遠くへ伸びる河のラインに沿って歩くような一定のAndante。どうしてそう感じるのか、それは取材の中で分かりました。

お気に入り・その1 さてそんな和田先生のお気に入りのスポーツが、「水泳」。この時期は、週に3、4回、昼休みに大学のプールで泳ぐそう。かつての教員水泳同好会の創立メンバーという先生は、今でも他の先生とともに泳ぎ続けられています。「体に染みついて泳がないと物足りない」とおっしゃいます。

「私は高知県の生まれで、夏の暑い時期は川へ泳ぎに行きました。誰に教わったのでもないけれども、自然と泳ぎ方を覚えてしまったんですね」他にも、ジョギングや登山をされる先生は、出張先ではそこでジョギングをされるそうです。また昨年に引き続き、今年のおたる運河ロードレース大会(6月21日開催)にも参加されました。スポーツマンですねとの感想には、「ゲーム性のあるスポーツはし



研究

研究者としての心を持ち続けることが大切な職業。経済法が専門の和田先生は、独立禁止法を中心とした研究をされています。若い頃はドイツの法制度も研究されていたそうです。(佐藤)

ないので、スポーツマンではないです。けれど、体を動かして汗をかくのは好きです」とのお返事が。

お気に入り・その2

もう一つの和田先生のお気に入りは、「家庭菜園」。なんでも春はクロッカス、チューリップ、芝桜といった花で花壇が賑やかになったそうです。また「簡単なものしか育てていないけれど」と少し照れながら、トマトやカボチャ、インゲンなどの野菜も栽培されていることを教えてくださいました。こうした家庭菜園は先生にとって気分転換なのだとか。研究者の道に進まれた先生は、研究において「持続してやること」の大切さを強調されました。目標に向けて、一つ一つ積み重ね継続してこられた先生だからでしょうか。ずっと続けてこられたスポーツ、毎日世話が必要な家庭菜園。先生のお気に入りには、そんな「継続」「持続」が共通のキーワードになっているように感じられます。「今考えると、好きなことが仕事になっていて、幸せかもしれません」と和田先生。続けることを大切にするとともに、それを楽しまれている先生は、大きな研究が完成したとき、達成感とともに、研究者としてのやりがいを感じるそうです。



Message

皆さんには、4年間を目一杯、有意義に過ごしてもらいたいですね。学生生活は楽しいことばかりではなく、踏ん張って頑張らなければならない場面があるので、それから逃げてはいけないと思います。勉強でもそれ以外でも。そして自身を成長させる心がけを忘れないでほしいですね。

教育学

岡部 善平 先生

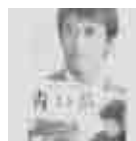
テーマ
映画



先生のお気に入り

映画がとても好きだという先生が紹介してくださったのは、重松清原作の映画『青い鳥』。『ある中学校のクラスでいじめによる自殺未遂がおき、休職した担任の代わりに着任したのは極度の吃音[※]の教師だった。生徒たちは吃音を笑ったが、彼は構わず、転校した生徒の机を教室に戻すことを命じ、その席に毎朝挨拶をし続ける。生徒たちは、彼から何を受け取っていくのか…』そんなストーリーです。「久々にいい映画を観たなあという感じがしました。一言一言の重みが伝わってきて、静かだけれど迫力のある、面白い映画だと思います」また、先生がこの映画をご覧になった場所『蠟座(さざりざ)』は、支配人が観て良かった映画のみを上映するというこだわりの映画館で、一押しだそうです。

▽上映は終了してしまいましたがもうすぐDVDが発売されるようです。
発売予定日：2009/7/24
発売元：バンダイビジュアル
時間：135分
価格：3,990円



Message

自分を取りまくあらゆるものごとから何かを吸収しようとする、少し貪欲なくらいの姿勢をもってほしいです。本にしても人にしても、一見そりが合わないところから、自分にとっての宝が見つかるかもしれません。“大学生活を充実させようと無理に考えなくてもいい、何か一点これだけは学んだということがあれば十分だ”と思います。

研究

教育社会学を研究しています。特にカリキュラム論を扱い、どのようにカリキュラムがつけられるか、また生徒はそれにどう適応するのかについてフィールドワークやアンケート調査を行い、分析しています。(須田)

※「吃音(きつおん)」…発音障害の一種。発音の際、第一音が容易に出ない、繰り返す、引き延ばすなど円滑に話せない状態。

「何が出るかな?先生のお気に入り!」は連載第三回目を迎えました!先生と学生の距離が近いといわれている商大。でも、「なんとなく話しかけにくい」とか「授業以外の顔は知らない」という人も多いのではないのでしょうか?今回も5人の先生の研究室にお邪魔してサイコロを振ってもらいました。サイコロの面はそれぞれ、映画、音楽、スポーツ、本、場所、フリーテーマです。普段見ることのできないあの先生の意外な一面が見られるかも?

社会学

宝福 則子先生



先生のお気に入り

時に厳しく、しかしいつも笑顔の絶えない宝福先生。学生の良い所を褒め、激励してくださる先生です。よく通るハリのある声の先生も、学生時代は小さな声だったとか。ドイツの大学で学んでいた頃、そこで外国人学生委員会の議長になられた先生は、「大勢の参加者の、白熱した議論をまとめるために、大きな声を出さざるをえなかったのね」と。帰国後も、授業をするうち、自然と鍛えられたそうです。今回紹介して下さった二冊はどちらも、著者が海外で出会った人々を中心に展開する、ノンフィクション。1960年代の社会的な背景もうかがわれます。「私がいた大学街の雰囲気似ている場面もある。同じ体験をしたから、共感できるのね、読んでみて」と先生。世界に目を向けたい学生にお勧めです。



『コルシア書店の仲間たち』須賀敦子、文春文庫、



『嘘つきアーニャの真赤な真実』米原万里、角川文庫

M age

友人をたくさん作って、冒険と思えるようなことや挫折も含め、学生時代でなければ出来ないことを経験したり、本も読んでほしい。

研究

発展途上国での環境問題についてその原因や過程について、貧困問題についても焦点を当てながら研究されています。(佐藤)

国際経済学

船津 秀樹 先生



先生のお気に入り

多趣味の船津先生。フリーのサイコロの目が出たので何でも答えてもらいました。大学生時代に世界の名著であるアリストテレスやソクラテスなどの哲学書に読み耽け、ゼミでは原書でケインズ全集を読んでいたそうです。他にも推理小説を読んだり、司馬遼太郎を読んだりと読書を趣味としていたといいます。でも最近は…忙しいことが多くなかなかまとまって空いた時間が確保できないため読書から遠ざかりつつあるそうです。さらにスポーツではバドミントン部の顧問になったのを機に、ジャージ&Tシャツに着替えて練習に毎回欠かさず参加しています。時々娘さんとフットサルもするそうです。最近凝っていることは自宅のガーデニングだそうです。“しゃくなげ”の木を種から育てようという試みを抱いて、やがては立派な木にしてみせようと。こちらはこれからの人生の楽しみの一つでもあるそうです。

しゃくなげの木



M age

「まとまった時間がある学生時代にぜひいろんな事に挑戦してみてください。そして一日一日を感謝して楽しんで生活してってほしいと思います。」

研究

政治的なリスクが存在する時に、貿易の利益は実現するのか? 貧しい国と豊かな国が経済統合することは、福祉の向上につながるのか? などの国際経済の理論的及び実証的研究をされています。(鈴木)

英語学

横村 栄美先生



先生のお気に入り

言語学や英語学の研究をされている先生がお勧めしてくれたのは、『認知科学への招待』(大津由紀雄、波多野諺余夫、研究社出版、3150円)という本。「心と言語の関係、脳と言語の関係、学習と記憶など、心の働きや脳との関係について研究する学問が認知科学です。この本では、認知科学という分野で行われている研究について、とてもわかりやすく書かれています。学生みなさんにぜひ読んでもらいたいです」また、ドライブや音楽鑑賞も好きだという先生ですが、特に、ファッション雑誌を眺めるのが好きだそうです。中でも『STREET』(ストリート編集室出版・780円)という雑誌がお気に入り。「ロンドンやニューヨークの街を歩く、一般の方が載っています。毎月この雑誌を見ておしゃれの最先端を勉強しています。学生の頃からずっと買っている雑誌ですね」

M age

なぜ大学に来てまで英語を勉強しなければいけないのか考える人がいますよね。他の外国語でもいえることですが、今この瞬間にも、言葉がわかることで得られる情報は増えていっています。4年間ゆっくり時間があるのだから、色々な授業をとるとかアルバイトをするなど、広く様々な経験をしてたくさんの方を考えてほしいと思います。

研究

英語の多義動詞の持つ意味について、意味に関連性があるのか、意味同士のネットワークが作れるのか、最も中心的な意味と中心的ではない意味とはどう関係しているかなどを特に研究されています。(柳田)

部・サークル紹介

自分の部・サークル,そして団体を紹介するこのコーナー!!知らなかった活動を知ることのできる場でもあります。入り損ねてしまった人,諦めかけていた人も,これを参考にもう一度考え直してみては?

昼間バドミントン部

羽球部 主務 近藤 竜広

こんにちは。商大羽球部主務の近藤です。私たちは毎週火曜日(15時~19時),木・金曜日(17時~21時),土曜日(9時~12時)に,商大の第一体育館で活動しています!現在部員は4年生を含めて44名!日々仲良く楽しく練習しています。「部活」と聞いて,キツそうだし,入部しづらいな…。とか考えているそこのあなた!そんなことはありません。大学からバドミントンを始めて,大会などで活躍している先輩たちもいるのですから☆

そんな我が部ですが,ただひたすら練習に明け暮れているだけではありません。学祭にたこ焼き屋を出店してみたり,夏には有志を募ってキャンプに行ってみたり…と学生生活もエンジョイしているのです。

興味が湧いた方は,経験者・未経験者問わず,練習にぜひ見学に来てみてください!美人マネージャーが迎えてくれます♪皆さんのお越しをお待ちしています~!



詳細はポスターを見てください★



Canal

私達は人と人を繋ぐというのをコンセプトに,様々なもの・サービスを提供したり,仲介役となる活動をします。具体的には,自分達でホームページを作りそこで小樽の隠れたイベントの情報を発信したり,商大生のための小売場所を提供することです。これは,一般の学生にモノを売るための場所を私たちのホームページで貸し出すことです。さらに,地獄坂工房さんと連携して商大グッズの新製品案の募集をすることなども視野に入れています。

現在(6月時点)はホームページに掲載するための情報収集をしながら,ホームページ確立に向かって活動しています。一緒に活動してくれる仲間も募集しています!

今後は実際に小樽のイベントを取材していき,ホームページを充実させていきたいと考えています。またラジオ局や新聞社にもアピールできるような活動をして,多くの人にホームページの存在を知ってもらうことが目標です。

室内管弦楽団

危機を乗り越え部員が一体となった！

今年に入って10人ほどいた4年生の先輩が活動できなくなり、更に3年部員が2人に減るという危機的な状況を迎えた室内管弦楽団。そんな室管が今、生まれ変わろうとしています。今回は現在団長の児玉恵梨さんら3人、そして今年からコーチとして指導を引き受ける相内先生にお話を聞きました。

「今までは、先輩が後輩に教えるスタイルだったのですが、急に減ってしまって」ピンチに陥るところだったという児玉さん。転換期は卒業式でした。

ここ数年卒業式では、室内管弦楽団と、相内先生がコンサートマスターを務める『札幌シンフォニエッタ』が合同で演奏を行います。今年の卒業式では卒業生の「一緒にやりたい」という要望により、初めて卒業生もオーケストラピットに入って練習しました。練習から相内先生の厳しい指導を受け、皆で成功させた卒業式。卒業生たちは「すごく

いい思い出になった」と振り返り、現役生たちも「これからもこんな風にやりたい」と、指導を受けながらみんなで練習するというスタイルも気に入りました。そして嬉しいことに今年は、「放っておけない」と忙しい4年生も手伝いに来てくれています。外部からのコーチも増やし、さらに練習内容を充実した質の良いものにし、団の生まれ変わりを目指します。これからの管弦楽団の活躍に期待です。

↑昨年十一月にマリンホールで行われた定期演奏会



団員からのひとこと・今後の目標

児玉 恵梨さん（団長・3年）

「11月に行われる定期演奏会に向けて日々練習をがんばっています。緑丘祭や部内発表会など、一つひとつ精いっぱい取り組んでこなしていくことで、演奏会につなげたいです。また、団長としてもしっかりしなくてはと思っています」

福内 望さん（3年）

「3年生として団を引っ張っていきたいです。そして、演奏している自分たちも楽しみ、見てくれるお客様にも楽しんでもらえるような演奏会を実現したいです」

松本 賢太さん

（コンサートマスター・2年）

「コンサートマスターを引き受けたからには、演奏を引っ張っていききたい。これから演奏会に向けてもっと力をつけていきたいです」

相内先生からのひとこと・100周年への構想

「今の室管はまだオトナのオケにはなっていません。演奏力はもちろんですが、判断力、情報収集力、決定力、コミュニケーション力をもっともっと磨いてほしいです。それはあともう少しの努力でそうなれると思います。時間はかかるかもしれませんが、室内管弦楽団は必ず生まれ変わると期待しています。」そして、相内先生には構想が・・・。

「2011年に商大は100周年を迎えます。そこで、100周年を記念する大規模なコンサートを行いたいと考えています。市民が100周年をお祝いして一緒に歌い、小樽にある大学と市民が一体となって演奏をすることを目指しています。そのために室管が核になってほしいので、今から一緒に土台作りをしていこうと思います」

室管の活動：毎週水曜日に5号館1階、土曜日にはサークル会館1階台練習室で2から3時間練習を行っています。夏休みは5時間以上の練習があります。室管は企画からすべて学生主体で行っています。「大変な分、勉強になるし活動はとっても楽しい」常に団員募集中！興味を持った方→syoudai_situkan@yahoo.co.jp まで

相内先生が活躍！札幌シンフォニエッタのHP <http://sinfonietta.hp.infoseek.co.jp/>



創立百周年記念事業 ～98年度活動報告～

2011年(平成23年)の創立百周年に向けて活動を進めている本委員会。今年度は、百周年まであと2年ということもあり、今まで以上に活動に力を入れてきました。その内容を報告します。本委員の活動によって皆さんが百周年を実感し、共に盛り上げて頂けることを願っています。

1. FMおたるラジオにてPR!

昨年同様、FMおたる「リクラジ」(旧「ともラジ」, 毎週土曜10時から12時放送)の中「ショータイム」というコーナーに月に一度出演させていただいています。そこで、百周年をPR!

2. 「ともラジ」の最初で最後のイベントに参加!

3月21日に小樽運河プラザで行われた「ともだちラジオ“ありがとね。”」にて、お店を出しました。北ガスさんのご協力も得て、おいしいクッキーとパウンドケーキを販売することができました。



3. 第57回緑丘祭ステージ企画実施

昨年度に続き、緑丘祭にてステージ企画を設けさせていただきました。今年度は、「クイズ教授に挑め!」というもので、授業ではおなじみの教授の方々や、商大職員の方々からクイズを出して頂きました。学生だけでなく、地域の方々も楽しめる内容を心がけました。

そして、7月で3年生4人岸本隆志(緑丘祭実行委員)、中村圭介(自治会)、松岡宏之(音芸連)、梁川加奈未(学園だより)は引退します。ご協力頂いたすべての人に感謝します。ありがとうございました。

皆さんのご意見お待ちしております!

商大百周年もうすぐ!「こんな企画をしてみたい」「こんなイベントがあったらいいな」百周年を盛り上げるようなアイデアがあったらなんでも教えてください!ご意見・ご要望をお待ちしております!

ouc_100th@yahoo.co.jpまで

4. 百周年記念冊子を発行

百周年を記念した冊子「Countdown」を創立記念日(7月7日)前後に発行。学生インタビューや教授インタビュー、過去を振り返る記事、未来に向けての記事など内容盛りだくさんです!まだ読んでいない方はぜひご覧下さい。



5. 写真の展示

98周年年度の学生の様子を写真パネルにして学生会館



2階に展示しました。これを来年も行い、百周年日には3年分の写真を展示する予定です。思い出を楽しんでいただくと共に、百周年を実感して頂く目的です。

6. 寄せ書き

写真の展示と同様、学生会館2階に旗を設置し、皆さんにメッセージを書いていただきました。「今」の気持ちを文字で残す!これも百周年目に3年分展示予定。

編集員が気になる旬の話題をピックアップする新コーナーです！

TOPIC1: 商大周辺のお店取材してみました！

地獄坂の商業高校の向いにある、ログハウス調のレストランには素敵なランチがあるのはご存じでしょうか。このかわいいレストラン「Sant Cielo!」は、週替わりで様々なイタリアンを楽しむことができます。イタリアンというと、ちょっと学生には手の届かないイメージですが、「Sant Cielo!」はランチであればスープとデザート付のランチを1000円以内で楽しむことができます。また、あまり知られていませんが100g200円ほどでキッシュ、カレー、ラザニアなどテイクアウトもやっているの、ひとり暮らしの学生さんにおすすめめだそう。学校帰りに気軽に寄ってみて下さい。

これは裏話ですが、実は商大の多くの先生がたまここの常連で、デートスポットとしても使われているとか。経済学科のS先生はと

ても恥ずかしがり屋で、いつも一番目立たない席にいつの間にか座っていることから、「ミスターブラインド」と、あだ名がついたそう。

オーナーより「学食もいいですが、是非卒業するまでに一度、足を運んでみてください!」とのことです。(高橋)

Sant Cielo! (サント チェーロ)

所在地: 小樽市緑4-1-3 定休日: 月曜日
ランチ11:30~14:00 ディナー17:00~22:00 (L.O)



△メインメニューはパスタ、リゾット、肉料理など数種類の中から選べます

TOPIC2: 「翔楽舞」演舞披露会に行ってきました！

6月12日(金)、本学のYOSAKOIサークル『翔楽舞』が、第18回YOSAKOIソーラン祭りへの参加に先立ち、第一体育館にて「演舞披露会」を行いました。今年、83人もの新入舞員が加わり、より迫力を増した『翔楽舞』。踊り子たちはみな生きいきとした表情で、テーマ『商大旋風』どおりの勢いあふれる力強い舞を披露してくれました。

演舞後、代表の沖崎桂宗さんにお話を伺ったところ、「一人ひとり

がモチベーション高く頑張って、自分を支えてくれました。ずっとダンスをやっていたので振付けを担当しているのですが、この振付けで150人が一緒に目標を持ってファイナルを目指せることがすごく嬉しくて・・・」と語ってくれました。また、『翔楽舞』のこれからのについては「『翔楽舞』は「小樽に地域密着」という形のサークルなので、ボランティア活動をしたり、イベントにたくさん出させていたでいて、これからもさらに小樽市を活性化していきたいです。そしてまた来年の本祭に向けて頑張りたいと思います」とのことで、今後の『翔楽舞』にも注目です。(須田・柳田)



▲代表の沖崎桂宗さん

第18回「YOSAKOIソーラン祭り」セミファイナル4位おめでとうございます!!

TOPIC3: 「蟹工船」映画公開！

商大出身の作家小林多喜二の不朽の名作「蟹工船」が7月4日(土)からついに劇場で公開開始!主演はあの松田龍平。豪華キャストで送られます。「蟹工船」を読んだ方はもちろん、まだ読んでない方もチャンスです!夏休みには映画館へ足を運んでみましょう!ユナイテッドシネマ札幌や、ワーナーマイカルシネマズ小樽で公開中!

編集後記

●「学園だより」編集員メンバー募集中!ご意見、感想もお待ちしております!ouc_gakuendayori@yahoo.co.jpまで

新メンバーがたくさん入ってくれて楽しさも倍増!でした。そして今回から代表になり、まとめる難しさや、面白さを味わいました。できる限り良いものにしようと勤めたので、楽しんで読んで頂けたら幸いです。

学生編集委員長

3年 梁川加奈未

新たに4名の編集員が加わりました!きっと色々なアイデアやユニークな企画が出されることと楽しみにしています。それぞれの意見を生かして、また新しい「学園だより」を作っていきたいです。

4年 佐藤 亜美

はじめまして。気づけばもう3年生の鈴木知明です。今号からこの「学園だより」の編集お手伝いとして活動し始めました。言葉を文字にするという単純にみえて実は難しい仕事に四苦八苦しつつも頑張っていきたいです!

3年 鈴木 知明

今回はじめて学園便りの編集のお手伝いをさせていただきました。一番感じたことは、取材でたくさんのお話をきかせてもらうのですが、書きたいことがありすぎて、その中から一番書きたいことを選ぶのが大変でした。

3年 高橋 莉奈

新しく「学園だより」編集員に加わりました須田幸野です。憧れの学園だより編集に関わることができて、嬉しいなあと思っています。アンケートや取材などドキドキだったので、皆さんの快い協力がとてもありがたかったです。

1年 須田 幸野

今春、学園だより学生編集員として加わりました、柳田です。この学園だよりが出来上がるまでに、たくさんの方のご協力を得ていることを実感しました。皆さんの期待に応えられるようなものになっていると嬉しいです。

1年 柳田 美幸

「小樽商科大学緑丘奨励金授与式」を挙行

6月18日(木)に学長室において、緑丘奨励金授与式が行われました。

「緑丘奨励金」は、本学の同窓会組織である社団法人緑丘会よりの援助を受け、1年次に優秀な成績を修めた学部2年生10名と大学院2年生の各専攻それぞれ1名に、奨励金を授与する制度で、平成19年度から開始されました。

山本眞樹夫学長から、各人に奨励金が授与されるとともに、学長並びに緑丘会理事長から励ましのお言葉をいただき式を終了しました。



平成21年度 小樽商科大学グリーンヒル(学生支援)プロジェクトの採択

小樽商科大学グリーンヒル(学生支援)プロジェクトは、本学の同窓会である社団法人緑丘会から助成を受け、本学学生が、個人又はグループで地域社会との文化的・社会的連携等に寄与する目的で、課外活動として行うプロジェクトに対して支援を行うものです。

本年度は、以下の企画が採択されました。

1. 「インターネットサービスの立ち上げ」

インターネットを立ち上げ、WeB上で様々な情報を小樽市民や商大生に発信する。

【Canal】

2. 「北海道学生ビジネスコンテストBiz'09」企画・参加

8月25日(火)～29日(土)の間、合宿型イベントで、学生がビジネスプランを作成することにより、学生が普段は意識しにくい社会の仕組みを考える機会を設けるとともに、他大学の参加者と意見交換等を通じ交流を図ることを目的とする。

【北プロ】<http://kitapro.ehoh.net/event/biz09.html>

ロードレース

6月21日(日)に開催された第21回おたる運河ロードレースに、和田副学長を筆頭に、教員、一般学生、留学生、更には本学OBの方々と、総勢21名の選手が出場しました。

全員が小樽商科大学のロゴ入りオリジナルTシャツを着用し、生憎の悪天候ではありましたが、全員が完走して、小樽商科大学の存在をアピールすることができました。

レース終了後は、OBの方々の計らいで交流会が開催され、来年も参加することを誓い合うなど、現役生とOBとの交流が行われました。



“100倍楽しむ”ヒントをつかもう!ルーキーズ・キャンプ2009

2006年から始まった「ルーキーズキャンプ」は、今年で4回目。新入生に「これから4年間の大学生活をどのように過ごしたらよいか」じっくり考えてもらうことが目的です。毎年、あるテーマについてのグループディカッションやプレゼンテーションを中心に、様々な企画が盛り込まれます。今年の「ルーキーズ・キャンプ2009」（5月23、24日）の参加者は、約70名。過去最多の参加者数となりました。

今回のキャンプのテーマは、「商大グッズを考えてみよう!」「商大100周年記念事業を考えてみよう!」。2年生以上のサポーターやOB・OG、ゲストのアドバイスを受けながら、各チームでユニークな企画が提案されました。「頭で考えず、手で考えて」という先生の言葉どおり、次々とアイディアが出され、大きな模造紙はアイディアを書いた紙で埋まっていきました。今年の優勝者は、商大グッズとして「商大トランプ」、商大100周年記念事業として「ジンギスカンパーティー&オルゴール販売など記念事業全体をコーディネート」を提案した2チームとなりました。

「自分の夢を見つけたくて」「友だちをつくりたくて」「自分から何かに参加してみたかったから」など、参加の理由はそれぞれ。「複数ある意見を一つに絞り、それを具体的な案にするのが難しかった」などの感想もありました。ゲストとして参加された、小樽市議会議員・成田祐樹さん（本大学院修士課程2年）は、「参加された皆さんから、将来のためにステップアップしたいという意欲を感じました。部活やサークル以外で、このように年代を超えて人と接点を持てるのは良いことですね」とおっしゃっていました。

またサポーターとして参加された加藤あかねさん（4年生）は、「私はこのルーキーズキャンプの1期生。本当に参加して商大が100倍楽しくなりました。このキャンプの良さ・意義を一人でも多くの後輩に伝えたくて今回サポーターとして参加しました。将来はOGゲストとしてこのキャンプに参加するのが夢です」ルーキーズ・キャンプの可能性はまだまだ広がりそうです。（佐藤亜美）



北海道新聞の記者
さんも取材にいら
していました。



薬物乱用の防止について

教育担当副学長 大矢 繁 夫

最近、大麻取締法違反事件が、相次いで発生しています。大麻等の薬物は、その乱用だけではなく、所持や栽培・製造あるいは販売行為も重大な犯罪行為であり、大麻では5年以下、覚醒剤では10年以下の懲役と、法律で厳しく罰せられるとともに、薬物の乱用は心身を蝕み、通常の社会生活が送れないようになります。

また、本学として、万一そのような行為を行った学生があれば、退学を含む厳重な処分を下すことになります。

このように、安易な気持や一時の興味で不正薬物に接すると、取り返しのつかない結果になりますので、薬物乱用の甘い誘いには気をつけるとともに、小樽商科大学の学生としての自覚を常に持ち、責任ある行動を心がけるようお願いします。

【参考】大麻取締法

大麻の所持・譲受・譲渡（第24条の3） 5年以下の懲役（営利犯の場合は、さらに重い刑と罰金）

「所持」とは、大麻を管理できる状態にあることをいいます。管理できる状態にあるかどうかは、社会通念によって決定されます。現実には手に持ったり、身につけている必要はありません。

また、大麻の所有権の有無は関係ないので、他の人から依頼されて保管している場合や、拾ったり、盗んだりして保管している場合も所持にあたります。

「譲渡」とは、相手方に対し、覚せい剤についての法律上又は事実上の処分権限を与えて、覚せい剤の所持を移転することといい、「譲受」とは、相手方から、覚せい剤についての法律上又は事実上の処分権限を与えられて、覚せい剤の所持の移転を受けることをいいます。有償・無償は問いません。

新任教員紹介

NEW FACE

劉 慶豊 (りゅう けいほう)

准教授 (商学部経済学科)

はじめまして。4月から本学経済学科の教員として赴任しました、劉慶豊と申します。商大の伝統のある優れた教育と研究環境を求めて隣の国、中国から小樽にやってきました。

本年度、私は計量経済学を担当します。計量経済学は統計学の手法を利用して経済学の理論モデルを現実のデータに基づいて検証したり、データから出発して経済現象の背後に隠れている規則を発見したりするための学問です。応用としては、市場アンケート調査の分析、政府施策の効果の評価、マクロ経済予測、金融リスクの分析などがあります。応用と直接繋がっているため、他の数学と違って理解しやすい側面もあります。私は計量経済学の実用さとその数学的な精緻さに魅了されており、その魅力をできるだけ多くの学生に伝えたいと思っております。

私の最近の研究テーマは主に計量経済学の新たな手法の開発や金融リスクに関連する実証分析などがあります。金融リスクの管理に関連する学問の中では計量経済学は主役となっています。今、次の金融危機を教訓にして、その再発を防ぐために、既存のリスク管理に利用される計量経済学の手法の改良にたくさんの研究者が取り組んでいます。

近年、グローバル化の進展に伴って、日中間の交流が盛んになり、経済的なつながりが強くなっています。学生の皆さんが国際交流に関心を持って積極的に参加することにより国際的な感覚を養い、将来社会人として活躍するための一つの素質を獲得することができます。関心のある学生の皆さんと日中交流をはじめに、国際交流活動に取り組んで行きたいと思っております。

これから学生の皆さんと一緒に商大での大学生活の魅力を発掘して行きたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。

河森 計二 (かわもり けいじ)

准教授 (商学部企業法学科)

はじめまして。本年4月に本学に着任しました河森計二です。企業法学科で「商法」を担当しています。私は、生まれも育ちも札幌です。いうなれば「生粋の道産子」です。北海道で生まれ育った私にとって、多くの優秀な人材を輩出し続ける小樽商科大学で教育・研究に専心できますこと、大変光栄に思っております。

私の専門分野は商法、特に保険法です。現代社会では、個人や企業はさまざまなリスクに囲まれています、社会で発生するさまざまなリスクに対処するため、一つの手段として保険制度が機能しています。私は、この保険に関する法的問題、なかでも生命保険契約をめぐる法的問題について研究しています。しかし、他の分野の先生もそうですが、自分の主たる分野（保険法）のみを研究すればよいのかというそうではありません。保険法を勉強するためには、保険契約の基本となる民法を理解しなければなりませんし、保険に入るには、保険会社と契約を結ばなければなりませんので、民法のほかに商法も理解しなければなりません。そして、保険を引き受ける者（保険者）は会社（株式会社と相互会社）でありますから、会社を取りまく利害関係人の調整、あるいは会社の組織はどのような形態をとっているのかを知るため、会社法も勉強しなければなりません。ここまで聞くととても大変なことのようには思えますが、ここで言いたいことは、一つの専門分野を勉強する際、大きな視点から物事を見る目を忘れないように、関係する多くの法律あるいは他の学問にも興味をもち勉強していただきたいということです。4月からの数ヶ月間、小樽商科大学の学生さんと接する機会は多くはありませんが、その中でも、幸いにして明るく熱心に、そして幅広い視点から物事を見つめ、授業にとりくむ大学院生

の方々と出会うことができました。それぞれの方が夢を持ち、それを夢に終わらせるのではなく、一步一步実現にむけて努力する姿を目の当たりにすると、大変うれしく、こちらも励みになります。今年度は、この大学院の授業のほかに、昼間コースと夜間主コースの「商法Ⅰ（会社法）」を担当します。授業は後期になりますが、そこでもいろいろな学生さんとの出会いがあることを楽しみにしています。

もう一つ、私は、法律とは別の分野にも興味を持ち続けています。いま皆さんが手にする5千円札。そこに描かれている人物は誰でしょう？ 答え。樋口一葉です。この樋口一葉の研究にも関心を持ち続けています。私が大学生の時は、樋口一葉の縁（ゆかり）をもとめ、一葉が暮らした東京をはじめ、静岡、山梨、さらには熊本を、実証研究と銘打って、実際に歩き調査したこともあります。文学に関連して、小樽には、皆さんの先輩でもある小林多喜二や伊藤整の碑、あるいは石川啄木、並木凡平、小田観螢等の文学碑があります。法律に限らず、いろいろな分野の方々と出会い、お話をお聞きすると、これまで定説であったことを違った視点から見つめなおすことができ、自身にとって研究・教育の大きな糧となっております。大学生活はあっという間に過ぎさってしまいます。伝統ある小樽商科大学において、さまざまなことに興味を持ち、さまざまな「人との出会い」を大切にしていだきたい（していきたい）と思っています。皆さんとともに、清風歩歩、教育と研究に励んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

第57回緑丘祭

第18回緑宵祭



テーマ：ムゲンダイ





HEALTHY LIFE JOURNAL

ヘルシーライフジャーナル

No.54

2009.7

小樽商科大学
保健管理センター

青年期の夏における心の処方箋

小樽商科大学保健管理センター

所長 菅原 照夫



春という、変化や発見に満ちた季節が過ぎ、いよいよ夏がやってきます。勝手がわからず右往左往していた新しい生活にもようやく慣れてくるこの時期は、一気に目標へと飛躍できる時期であると同時に、挫折や無気力を招く危険性を多く含む時期でもあります。

そもそも青年期というのは、個人が自己同一性＝「自分が何者であるか、何者でありたいか」を模索する時期であり、多くの学生諸君はそれを達成するために進学すると言っても過言ではないでしょう。しかし、自己同一性というのは非常に曖昧模糊とした掴みどころのない存在であるため、「自分は将来、こういう存在になりたい」という確固とした目標とそれに向かう意思を始めに持っていたとしても、同じ目標を持った同士と比べて思うような結果が出なかったり、他のことに目移りしてしまったりするうち、つい先程までしっかり見えていたそれを見失ってしまうことが多々あるのです。夏は特に、良くも悪くも日常生活・学問における「慣れ」が生じることに加え、季節柄や長期休暇などの要因も重なり目標に対する積極的活動がしやすい時期であるため、その頑張りに見合った成果が目に見える形で出てくれないと自信喪失や慢性的な苛立ちが生じやすくなります。

このような壁にぶち当たることは誰にでもあることで、むしろ自己同一性の探求を達成するために避けて通ることのできない局面であるとも言えます。ただ問題なのは、そうってしまった時にうまく対処ができないうちの中にあるモヤモヤした気持ちはきちんと処理されないまま、挫折感や喪失感と言った負の部分がどんどん大きくなり、しまいには立ち直りを不可能としてしまいかねないということです。そうなると、躁鬱病や統合失調症と言った精神疾患を引き起こしやすい、非常に危険な精神状態に陥りやすくなってしまいます。心に抱えた負の部分を、それが深刻なものとなってしまう前にうまく処理することが必要です。

さて、それでは悩みやストレスと言ったものをうまく処理するためにはどのようにすればよいのか。私は2つのことを推奨したいと思います。1つ目に「そのことについて誰かと話してみる」とを挙げます。多くの人が残念ながらこれについて過小評価してしまっていますが、実は心のわだかまりを解消するのにこれは極めて有効な方法なのです。実際に話して

みるまでは悩みを打ち明けるのがみっともなく思えたり、話す相手に多大な迷惑をかけることを危惧したりして話を切り出しにくいものですが、一度話し始めると言葉が次から次へと口を突いて出てくるようになり、それと同時に気持ちが楽になっていくのを実感できるはずです。助力を求めたりせず、ただ聴いてもらうだけでも自分の中で整理がついてきて、それまで自分ではどうしようもないと思っていたことに対しても解決の足掛かりが出来ることがあります。「話す」ということは、人に伝えることであると同時に、その事柄について少し離れた視点から客観視することでもあるのです。

悩みやストレスを乗り越えるために推奨することの2つ目は「適度に力を抜く」ということです。本来、一番良いのは何事にも余裕を持って取り組むことなのですが、一つの事柄に対して夢中になっているときなどは、そうすることが極めて困難なものまた事実です。なので、自分の中で少しでもオーバーワーク気味になっていると気づいた時にはそれ以上の無理はせず、休息をとみましょう。「今、手を休めてしまうと再開した時に質が落ちてしまう」と思うかもしれませんが、それは極めて不安定な状態で積み木を高く積んでいるのと同じで、どこか一点でも突かれてしまったらたちまち全壊してしまうリスクを多大に孕んでいるのです。休息をとることは心身の回復となるだけでなく、作業を再開する時に新たな視点や、没頭していた状態では気付かなかった落とし穴を発見することにもつながります。8、9割の力で1週間しか保たないより、5、6割程度の力で1カ月以上続ける方が最終的な完成度としては良いものができるでしょう。

悩みの原因や個人の性格などの要素もあるため、上に挙げた2つの方法にも個人差というものがあるのが当然ながらあります。しかしこれらの方法は益こそあれ、害はありません。なので、もしも自分ではどうしようもない壁に行く手を阻まれ、これ以上先に進むことが不可能のように思えた時に実行してみると良いでしょう。

青年期は以後の人生を決定する大きな時期であると同時に、全人生のほんの一部にすぎません。時には迷い、時には苦渋を味わいながら邁進していくのも以降における大きな糧となることを頭の隅に置いておきつつ、この季節を大いに楽しんでください。

写真でみる小樽高商・商大小史 ②③

百年史編纂室

ドイツ語劇 シラー作 『群盜』

市民にも親しまれてきた外国語劇。かつて緑丘祭のメインのひとつであった。東京外国語学校や旧制高等学校、あるいは本学のように外国語教育に力を入れる学校・大学が、戦後に至るまで学



ドイツ語劇 シラー作『群盗』の一場面
小野定利さん(1958年度卒) 寄贈



宇賀正男・小野定利 編集発行『希望』（大学祭記念特集号，
小樽商大文芸部，1958年10月27日）
小野定利さん（1958 年度卒）寄贈

園祭などにおいて披露してきた。一部の伝統校ではなお続いているが、本学では規模縮小の後、今は緑丘祭プログラムの演目には見られない。

上の写真は、一九五八年度卒の小野定利さんから、この六月一八日、寄贈していただいたものである。シラー作『群盗』の一場面で、小野さんの友人二人が、学んだドイツ語の台詞で迫真の演技をしている。当時の『緑丘新聞』などによれば、大

勢の市民も詰めかけている。文芸部で活躍していた小野さんには、『希望』（大学祭記念特集号、編集発行人・宇賀正男、小野定利、小樽商大文芸部、一九五八年一〇月二七日）もいただいた。なお、今回受け取った写真は、ゼミ写真も含めて計八枚ある。

『昭和三十一年以降 大学祭関係綴』

外国語劇は、学生が自主的に開催してきたものだ。とはいえ、台本の翻訳・作成や演出に協力した教員も

[illegible]

1957年の大学祭予算案
『昭和三十二年以降 大学祭関係綴』から

いたし、裏方で助力を惜しまなかった職員は少なくなかった。残された法人文書のひとつに、学生係『昭和三十三年以降 大学祭関係綴』というものがある。当時の学生部が、円滑に祭典の準備や実施が進むよう、きちんと資料を整理していた証であり、この簿冊以上にいろいろな形でも協力していたのだらう。関係資料の一部が時を経て集まってきた。外国語劇を、当時とは異なる視点でも、みることができる。



OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE
**GAKUEN
DAYORI**

No.156